

其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転

(『大無量寿経』 聖典四九頁)

「行巻」一五八頁では「その仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲えば、みなことごとくかの国に到りて自ずから不退転に到る」と読まれ、「信巻」二三九頁では「その仏の本願の力、名を聞きて往生せんと欲え、と言えり」と読んでおられる。

安楽浄土に 生まれんとおもえ

第17組 幸福寺住職

楠 信生

text by Shinsho Kusunoki

『仏法はありがたいことを聞くのではない、仏法の道理を聞け』と、くりかえして申しておりました」と安田理深先生の言葉を奥様である安田梅さんが『純粹未来—真実証について—』の中で紹介しておられる。ありがたいと感ずるころは大切であるが、ありがたいことを聞きたいという願望は、別な問題である。

この「ありがたいことを聞くのではない」という言葉から、蓮如上人の『御一代記聞書』の文を思う。

「聴聞、心に入れて申さん」と、思う人はあり、「信をとらんずる」と、思う人なし。されば、「極楽はたのしむ」と、聞き「参らん」と、願いのぞむ人は、仏にならず。弥陀をたのむ人は、仏になる。(聖典八七七頁)

「ありがたいことを聞きたい」ということと「極楽はたのしむと聞いて参らん」ということとは同質のことであろう。だが、ありがたいことを聞きたいという姿勢は批判されても、ありがたいことを聞きたいというところまで、無意味なものとして否定することはできない。求め方に問題があるのであって、求めるところまで否定されるべきではない。求めるところに正しい方向と方法を

示すものこそ仏教であり、曖昧に生きている者に、人生の真の目的とその目的を成就する道を真宗の教えは明らかにしてきたのである。そしてその道とは信こそが要であることを、法然上人は「当に知るべし、生死の家には疑を以て所止と為し、涅槃の城には信を以て能入と爲す（『選択集』真聖全一、九六七頁）」と説かれ、蓮如上人は「信心をもって本とせられ候う」（『御文』五帖目第十通）と述べられたのである。

真実信は、至心信楽の願に誓われていることであるが、親鸞聖人は「其仏本願力」の文を第十八願成就（「信巻」二三九頁）と同義とし、さらに第十七願成就（「行巻」一五八頁）の意味を持つ文として大切にしておられる。さらに「皆悉到彼国 自致不退転」の文は、第十一願成就と見ることができると先達は指摘しておられることである。

この「其仏本願力」の文について興味深い話がある。それは漢朝の玄通律師が戒を破った罪により閻魔の庁にいたったとき、ふと思い出した其仏本願力の文を誦したところ、閻魔法王が「これはこれ西方極楽の弥陀如來の功德をとく文なりといいて、礼拝し給いき」と言ったという話である。『黒谷上人御燈録』より（『大正藏』八三卷一七二頁）

このような伝説が語り継がれるほど大切にされた「其仏本願力」の文であるが、古来「破地獄の文」と呼ばれている。破地獄ということの意味はどういうことであろうか。思うに「破」とは、破るということであるが、何を破るのかというならば、地獄というものの実相に目覚めて実体化を破るのであろう。そして、真宗の教えは、自ら実体を破るというよりは如來の本願が地獄を怖れるところを破る光となるということである。地獄の地獄たるゆえんは、願を見失っているということがあるからである。

信ずることも疑うことも、曖昧なままに生きて、世間の目を恐れ、地獄を恐れて生きているわれらに、「如來のみな（御名）を信じ安楽浄土に生まれんとおもえ、みなもれず、かの浄土にいたる」と呼びかけられる。実体化を破ると同時に、日々の生活に往生浄土の現実感を生むものこそ、真宗における救済であることを、この「其仏本願力」の文によって教えられることである。